

ワニの口

第二特別調査室長

やまうち かずひろ
山内 一宏

論語に「過ちては則ち改むるに憚ること勿れ」とあるが、実践するのはなかなか難しい。自らのことでもそうであるのに、況んや恩師や先輩の業績を批判することをやである。例えば、学会で恩師の持説に反することは、今後の学者生命の点でタブーであるし、役所でも、代々の先輩が積み重ねてきた手法や方針に非を唱えることは、不可能に近い。長幼の序や厳格な師弟関係を重視する我が国においては尚更である。

このような土壌は大胆な政策転換を図らねばならない時に大きな足枷となっている。我が国の財政政策を顧みるに、1997年の財政構造改革法は大きな方針転換のエポックと言える。当時の政府は拡大する累積赤字に危機感を持ち、赤字国債の発行を毎年度、削減する条項を盛り込んだ財政構造改革法を制定し赤字拡大に歯止めを掛けようとした。不幸にも97年秋に海外事情としてはアジア金融危機、国内的には山一証券、北海道拓殖銀行の破綻を契機とする本格的なクレジットクライシスが発生し、翌年には戦後二度目のマイナス成長に陥り、拡張的な財政政策に大きく舵を切ったため、同法は僅か一年で停止された。

我が国財政の現況を語る際、「ワニの口」という言葉が人口に膾炙するが90年代後半以降、拡大する支出と低迷する税収で大きく開いた格差を視覚的に表現したものである。当時の経済政策は、金融政策が不良債権問題に端を発した金融システムの動揺と、ゼロ金利政策下、極度に自由度を喪失する一方、財政政策に大きく依存した形となっていた。米国からの要請とも相俟って、事業規模120兆円以上の数次の経済対策を含む景気刺激指向の予算が組まれてきたことはワニの口の拡大に拍車をかけた。

政府支出の乗数効果も低下しており、景気浮揚のため政府支出を拡大しても一時的に浮揚するがすぐその効果は剥落する。元に戻るから、また経済対策を打つが、すぐに前の水準に落ち込む。その繰り返しである。残ったのは巨額に上る累積赤字の山である。その過程で、旧来のやり方ではデフレスパイラルを脱却できないとの主張もあったが、「やり方が間違っているから景気回復ができないのではない。まだ不十分だからダメなのであり、もっと増やすべきである」という声に掻き消された感がある。今まで先輩が積み重ねてきた経験と成果を再考し、もし必要なら改める勇気があれば事情が違っていたかもしれない。

金融政策においても、2013年春、転機を迎えた。非伝統的とも異次元的とも言われる質的・量的金融緩和策の登場である。前回の量的緩和策からの出口戦略の際(2006)、それを可能としたのは銀行券ルールを遵守してきたことによる。今回、日銀はこれまで遵守されてきた同ルールを凍結し、一層の金融緩和を行い長期国債保有高を急増させた。前例に囚われずに未知のゾーンに踏み込んだ勇気は評価すべきかもしれないが、それが正しい判断かどうかは別問題である。昨秋には更なる追加緩和が行われたが、その根拠として現行の政策は正しいが効果が不十分なのは緩和が不十分と判断したためか、それとも誤りと認めることができないためなのか。今回の発行銀行券量と日銀買入れ長期国債量の乖離が第二のワニの口にならないことを祈るのみである。